

東京オリ・パラまで2年となり、ボランティアの募集などソフト面の対応も急ぐ段階に入った。大会への積極的なボランティア協力を通じて、共生社会にも備えたボランティア日数の国際標準化を目指したい

2020年東京オリンピック・パラリンピック開幕まで2年を切った。7月24日に成田空港や一宮町において競技のパフォーマンスやトークショーなどのオリンピック2年前イベントが開催されたほか、競技スケジュールの大枠が固まり、聖火リレーの日程も決定した(千葉県は20年7月2~4日)ことで、機運が徐々に高まりつつある。

大会に向けた準備状況を見ると、県内でのハード面の準備は着実に進展している。幕張メッセの大規模改修の着工や上総一ノ宮駅東口改札の新設決定、成田空港では混雑緩和策の柱として大会中に選手団専用の臨時ターミナルを設けることが公表された。一方、ソフト面では、大会ボランティア(8万人)や都市ボランティア(東京都:3万人、千葉県:3千人)の応募受付が千葉県の9月12日を皮切りに順次開始となるため、今後いよいよ本格的な準備段階に入ることになる。

ボランティア人材の育成・確保に向けた足許の取組みを見ると、千葉県では、ボランティア募集の説明を兼ねた「東京2020に向けたボランティアシンポジウム」を7月16日に開催。また「外国人おもてなし語学ボランティア育成講座」を開講して、街中で困っている外国人に簡単な外国語で積極的に声をかけられる人の育成にも取り組んでいる。また、千葉市では、オリ・パラに向けたボランティアリーダーを先行募集し、実践的研修を実施した。県・市の研修を受けた人は、この夏の世界女子ソフトボール選手権大会で外国人への案内や障がい者への対応を行っている。こうした経験を積んだ人はオリ・パラ大会時もボランティアのまとめ役としての活躍が期待される。

ところで、公表された大会・都市ボランティア募集要項を見ると、活動日数が最低でも5日(都市ボランティア)から10日(大会ボランティア)で、この長さが国際標準といっても、日本の社会人や学生にとってはハードルが高い。これに関して、鈴木五輪相が経済団体に対して、大会中の休暇取得に協力を求めており、これに呼応してボランティア休暇の導入に踏み切る企業が出始めるなど、今後拡がりが見込まれる。また、スポーツ庁と文部科学省が全国の大学等に対して、大会中の授業・試験スケジュール変更を促す通知を出すなど、現役世代のボランティア確保に躍起となっている。

英国では、2012年のロンドン大会を契機にボランティア活動が一段と活発になり、レガシーの一つとなっている。わが国は高齢者社会の先進国であり、社会的弱者との共生社会の実現が要請されている中で、ボランティア活動の活発化を東京大会のレガシーの一つとして、後世に残すことが是非とも必要である。東京大会への積極的なボランティア協力を通じて、年間5日のボランティア活動が当たり前になる機運が我が国でも少しずつでも醸成されることを期待したい。(大塚)

【図表】ボランティア募集概要

	大会ボランティア	都市ボランティア	
運営主体	東京オリ・パラ競技大会組織委員会	東京都	千葉県
活動場所	競技会場、選手村などの大会関係施設	競技会場周辺駅や空港など	
		<活動エリア> 羽田空港、都内主要鉄道駅、観光地、競技会場最寄駅、都内ライブサイト*	<活動エリア> 千葉会場、一宮会場、成田市内、成田空港、浦安市内(宿泊集積地)
活動内容	観客サービス、競技運営等のサポート、メディアのサポートなど	来場者・旅行者等への交通・観光案内など	
活動日数	10日以上(1日8時間程度)	5日程度(1日5時間程度)	
募集人数	8万人	3万人	3千人
応募方法	ウェブ	ウェブ、FAX、郵送	ウェブ、郵送

(注)1. 出所:各種報道資料をもとに、(株)ちばぎん総合研究所が作成

2. ライブサイト:競技会場以外で東京2020大会を経験できるよう、大型スクリーン等を設置した競技中継、ステージイベント、競技体験等を実施する場所